

# 墓石に彫られたフランシス・クォールズと 「詩篇歌」

——近代初期英国におけるプロテスタント派の  
瞑想を巡って\*

松 田 美作子

フランシス・クォールズ (Francis Quarles) の『エンブレム集』 (*Emblemes*) は、1635年にロンドンで刊行された初版以降も次々と版を重ね、20世紀初頭にいたるまで大いに人気を保った作品である。このロングセラーとなったエンブレム集は、アルチャーティを祖とする人文主義的エンブレムブックではなく、イエズス会派が反宗教改革運動の手段として大量に出版した宗教的エンブレムブックを基にして、英国のプロテスタント信徒に向けて部分的に書き換えたものである。本論では、17世紀中葉という政治的にも宗教的にも激動の時期に、国教会派にとどまらず受け入れられたクォールズの『エンブレム集』のなかでも、特に「詩篇」を扱ったエンブレムに注目することで、エンブレムというジャンルがどのように信徒の信仰生活に影響を与え、受容されていたかを明らかにする。「詩篇」は初期教父時代より注釈も多く、中世ではプリマーとして修道士の教育の根幹をなしていた。(Brown 4) その詩的で感情に訴える特質は、典礼でも大変重用されていた。(Kuczynski 192) 宗教改革以降、「詩篇」は詩篇歌として礼拝に欠かせないものとなって、新教徒の生活にも親しまれていく。ルターは、「詩篇」にはあらゆる敬虔なキリスト教徒の心情の歴史が記録されているとし、自ら韻律を整え「詩篇歌」を著した<sup>1)</sup>。カルヴァンも同様に「詩篇歌」を著しており、ルターの「詩篇歌」に影響を受けた1542年の *The Geneva Psalter* の「読者への書簡」で、以下のようにその意義を述べている。

And in truth we know by experience that song has great force and

vigor to move and inflame the hearts of men to invoke and praise God with a more vehement and ardent zeal. It must always be looked to that the song be not light and frivolous but have weight and majesty, as Saint Augustine says (*Epistola* 55. 18. 34), and there is likewise a great difference between the music one makes to entertain men at table and in their homes, and the psalms which are sung in the Church in the presence of God and his angels. (Translated by Oliver Strunk, Tomlinson 87)

「詩篇」を歌にして歌うことに、改革派はパウロの「コロサイの信徒への手紙」中に根拠を求めた。「キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、論し合い、詩篇と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい」(3:16)そして、1565年の *Geneva Psalter* のなかで、Claude Goudimel は教会だけでなく、各々家庭でも歌うことで神を喜ばせるように助言した。(Tomlinson 80) 上の引用文中で聖アウグスティヌスも認めるように、「詩篇歌」はみ言葉を伝える大変効果的な手段であった。そこで、カトリック教徒のメアリ女王の治世にイングランドを脱出して「大陸」にいた新教徒たちは、ジュネーブやフランスにおいてすでに普及していたクレメン・マロ (Clément Marot) やテオドア・ド・ベゼ (Théodore de Bèze) の「詩篇歌」に親しみ、のちの英国における詩篇歌の発展に大きな影響を与えたのである。彼らのひとりにジュネーブ聖書の主な翻訳者であり、重要な英語の「詩篇歌」、いわゆる “Sternhold and Hopkins Psalter” (*Whole Booke of Psalms*, 1562) の編者であったウィリアム・ウィットインガム (William Whittingham) がいた。このスターンホルドとホプキンスの「詩篇歌」は、オランダのプロテスタントが歌っていたもので、当時聖書と合本で出版され、Hamlin によれば、1562年から1696年までに700版以上がさまざまなサイズで出回っていたという。(38)<sup>2)</sup> スコットランドにも1564年に伝えられ、1650年に *Scots Metrical Psalter* が刊行されるまで使用された。新大陸のピューリタンたちに用いられた *Bay Psalm Book* もこれに基づいている。「詩篇歌」はエリザベス朝に入って、祈祷書 (*The Book of Common Prayer*) が制定されると、ますますポピュラーになって礼拝で歌われたし、各家庭や教会に通う道

でも歌われるほどであった。それは、シェイクスピアの『ヘンリー 4 世・第 1 部』で、フォールスタッフが己の放蕩三昧を棚に上げて、“I would I were a weaver; I could sing psalms or any thing” (2 幕 4 場 133-34 行) とふざけるように、機織り職人でも歌えたのであり、広く普及していたと思われる<sup>3)</sup>。ヘンリー 8 世による宗教改革によって聖堂や聖像はことごとく破壊され、内壁に描かれたキリストの生涯や聖人のフレスコ画も漆喰で上塗りされ消された。徹底した偶像破壊の結果、視覚によって信徒の信心を高めることができなくなった新教の教会では、信仰を高める手段として歌を奨励したことは、想像に難くない。しかし、み言葉を耳から入れるのみでとどまっていたとは考えられない。英国においても、視覚と聴覚双方の協働による信徒の教化を図る宗教的エンブレムが、クォールズをはじめとして作成され、受容されていたのである。それは、エンブレムがプロテスタントの瞑想法と矛盾せずに機能していたからではないだろうか。瞑想は罪の自覚がもたらす悲しみから始まる。そこで、当時の説教や詩でも「詩篇」のなかでも、いわゆる「痛悔詩篇」(6、23、38、51、102、130、143 番) がよく取り上げられた。罪の自覚に苦しみ、慈悲を求めて痛悔する内容は、日々良心に照らし合わせて内省するプロテスタント派の個人的なディヴィジョンに適していたのである。(Lewalski 46) 「詩篇」によせる関心の高さは、16、17 世紀の英国の詩人たち、ワイアットからミルトンにいたるまで、そしてジェームズ一世を含むほとんどすべての主要な文人が、全体あるいは部分的な「詩篇」の翻訳を試みていることから明らかである。クォールズの『エンブレム集』においても、瞑想に適した痛悔詩篇は重要な意義を持っていた。

クォールズの『エンブレム集』は、イエズス会士のヘルマン・フーゴ (Herman Hugo) の『敬虔な欲望一聖なる教父たちのエンブレム、悲歌、情感によって解明された』(*Pia Desideria Emblematis, Elegiis et affectibus SS. Patrum illustrata*, アントウエルペン、1624 年) と、アントウエルペンのイエズス会修辞学学院の 9 名の生徒たちによって作成された『世界像一世界の災厄と危険、神的爱と人間的愛の対立がエンブレムによって解説される』(*Typus Mundi, in quo eius Calamitates et Pericula nec non Divini, humanique Amoris Antipathia, Emblematicè proponuntur*, アントウエルペン、1627 年) を基にしている。5 巻で構成され、各巻に 15 の

エンブレムが掲載されている。これは、フーゴの15編の Psalms of Degrees (詩篇 120-134 番、または Songs of Ascents とされる) と、ヤハウエの神殿の15階段を踏襲しているためである。1、2巻は、『世界像』の一部を省き、クォールズが新しく考案したものを加えた。そして、モットーのない『世界像』の図像にモットーを加えた。以後の巻は、図版に少し手を加えているが、詩文はほとんどそのままである。ただし、ロヨラの瞑想の段階を示唆するフーゴのモットーを削除し、代わりに新たに聖句のモットーを追加し、さらに著者自身の長い説明的詩、教父たちからの散文の引用、そして4行のエピグラム、結論、決意を付している。こうした改訂により、大陸のカトリック派の瞑想の図式をプロテスタント派の瞑想に適合させた、折衷的なエンブレム集が出来上がったのである<sup>4)</sup>。1638年にクォールズが刊行した『人生のヒエログリフ集』(*Hieroglyphikes of the Life of Man*) は、1643年以降19世紀中葉までしばしば『エンブレム集』と合本で印刷されて版を重ねた。「ヒエログリフ」と題されているが、エンブレムと変わらないモットー、図像、そして詩文で構成されており、基本的にエンブレムと相違なく認識されていたため、ともに考察の対象とする。

クォールズに限らず同時代の詩人たちの作品は、風刺詩などを除いて、さまざまな個人的経験や感情の表出に、瞑想の伝統と密接な関係が認められる。たとえば、ジョン・ダンの *Holy Sonnets* 19編は、瞑想的といつてよい連作であり、それらは自身の内なる罪を認め、改悔と神の選びの証を追求するプロテスタント的なディヴェーションを表している。罪を自覚し、痛悔することは、1) 自身の罪と神の選びの証についての瞑想、2) 改心、3) 自己についての瞑想 (Meditation upon one's own sin and evidence of election, regeneration, meditation upon the self) で構成されるプロテスタント派の主な3種の瞑想の一段階である。とくに自己についての瞑想は、いまだ改心していない者に対してカルヴァン主義者が称揚していた。(Lewalski, 158) 通常、プロテスタント派の瞑想には、deliberate と occasional (または extemporal) の2種類があり、どちらも聖句と個人的経験との相互関連を追求するものである<sup>5)</sup>。カトリック派の瞑想と同様に自身の信心を深め、改心の経験を重視するが、相違点もある。エリザベス朝には、イエズス会士ロバート・パーソンズ (Robert Parsons) の *Christian Directorie* (Rouen, 1585) やガスパー・

ロート (Gasper Loarte) の *Exercise of a Christian life*, trans. by Stephen Brinkley (Rheims, 1584) といったカトリック派の瞑想の手引書に対抗して、多くのプロテスタント派の手引書が書かれた。最初期の瞑想の手引書、*Seven Treatises, Containing...the practice of Christianity* (1603) の著者、リチャード・ロジャーズ (Richard Rogers) は、イグナティウス・ロヨラの確立したカトリック派の瞑想法を次のように非難した。

A “ridiculous tying men to a daily taske of reading some part of the storie  
Of Christs passion, and saying certaine prayers throughout the weeke”. (sig A6)<sup>6)</sup>

聖書中のキリストの受難の箇所を読み、定められた祈りの言葉を唱えるのみで機械的に行われる瞑想の方式を攻撃したのである。その代り、幅広くみ言葉を読み、受難に限らずさまざまなトピックで瞑想を行い、それらのトピックを自らにあてはめて心を清めることを奨励した。イグナティウス派の瞑想は、以下のような手順に従って行われる。

1. 「場所の想設」とそのほかの導入、感覚の適用
2. 分析、神学的意味の検証
3. 対話、意志による決断<sup>7)</sup>

ここでは、瞑想者は自身の創設した聖書の場面、場所、出来事を起因として、それに自らを適合させる。そして、あたかもそれらが目前で起こっているかのようにとらえ、霊的な状態にあった心情を掻き立てる。しかし、プロテスタント派の瞑想では、聖書中の場面を鮮明に再現するのではなく、自身の霊的状态を知るために聖句を適用するのである。そして、瞑想する場所も限定されず、聖句も万物もすべて信徒個人が神とのデイヴオーションのために適用するのである。多くのプロテスタント派の論考において、瞑想者の手本とされたのは、イサクであった。『創世記』24：63において、彼は「夕暮れ時、外に出かけた。野原で瞑想するために。」(“went out, to meditate in the field, at the eventide.”) 神の御心のままに燔祭の犠牲になるのもいとわぬ彼の信仰の堅さは、プ

ロテスタント派にとって、自然にいます神やその日の経験について、屋外で歩きながら一人で行う瞑想の先例となった。(Lewalski 149) そうした新旧の相違に注目した場合、罪の自覚、改心、悔い改め、信仰へと至る魂の上昇過程のうち、罪ゆえに神に拒まれ、選り外れるかもしれないという恐れは、ダンをはじめとする 17 世紀の宗教詩人たちに共通する枢要な問題であった。どのように罪を自覚して、悔い改めれば神の義認を得られるのか、この問題と密接にかかわるのは詩篇 51 番 4 節である。(Hamlin 177)「痛悔詩篇」の真ん中に位置するこの詩篇はクォールズにおいても重要視されている。詩篇 51 番 4 節は、パウロの「ローマの信徒への手紙」3:1~4 に基づく。

Agaynst the onely have I sinned, and done evell in thy sight; that  
thou myghtest be justified in thy saying, and cleare when thou art  
judged.<sup>8)</sup>

あなたはみ言葉を述べる時に神によって「正しいとされ」、裁きを受けるとき罪を清められるとすれば、彼らにとって瞑想の出発点として罪の自覚について瞑想することは、大変重要なこととなる。罪の問題と信仰による義認が繰り返し希求されているダンの『聖なるソネット』(Holy Sonnets) も、副題に“Divine Meditation”とあるとおり、そうしたプロテスタント的な瞑想ととらえることが可能である。自分の真っ黒な魂に(“On my black soul”, ソネット 4 番 1 行)」、どうすればこの地で改悔できるのか教えてくれるよう(“here on this lowly ground, / Teach me how to repent,” ソネット 7 番 12-3 行)、神に懇願し、キリストの血で清められ(“wash thee Christ’s blood”, ソネット 4 番 13 行)、あるいは情熱の炎で焼かれ(“Burn me O Lord, with a fiery zeal / Of Thee and Thy house”, ソネット 5 番 13-4 行)、作り変えてほしい(“make me new”, ソネット 14 番 4 行)と訴える<sup>9)</sup>。罪をぬぐえない魂は、涙の洪水でおぼれそうになり、血で洗われ火で焼かれ、神の手で作り直されることを望む。個人の内なる神との対話によって信仰を高めることが、プロテスタント派にとって神の恵みにあずかる唯一の方法であり、瞑想はそのために行うのである。これは、ジョージ・ハーバートやヘンリー・ヴォーンといった同時代の代表的宗教詩人にとっても同様で

あった。

優れた宗教詩人たちと同時代人であるクォールズの『エンブレム集』は、タイトル・ページに付随した「希求の祈り」から始まる。そこでは、冒頭から音楽の用語が頻出し、彼が自身の作品をどのようにみているか理解できる。

Rowze thee, my soul, and dreine thee from the dregs  
Of vulgar thoughts; Skrue up the heighthed pegs  
Of thy sublime Theorboe foure notes higher,  
And higher yet; that so, the thrill-mouth'd Quire  
Of swift-wing'd seraphims may come and joyne,  
And make thy Consort more than halfe divine. (“The Invocation”, 1-6)

3行目の「高貴なテオルボ」とは、ドリア旋法のことで、教会旋法のもっとも主要なものである。プラトンが『国家』で推奨した高雅で荘重な音階であるが、それよりも「天上的栓を4音階高く締め上げよ」と、より高い調べを奏でようとしている。つまり、彼のエンブレムの詩文はテオルボで歌われる以上に天上的なものであり、エンブレムを読むことは、教会で聖歌を聞くに等しいディヴォーションナルな行為であることを示唆している。そして、タイトル・ページの図版には詩人の魂を表すミュースが、大型のリュートであるテオルボを持って天に向かって歌っている。〔図1〕右側にあるのは地上的な名誉と世俗詩、左側にある青葉を茂らした木は宗教詩を表し、



図1 Francis Quarles, *Emblemes*, The Invocation

近くには「より高次のものに歌いかけよう」(“Dum Coelum aspicio, Solum despicio”)という motto が記されている。「詩篇」が詩篇歌となって歌われて信徒に身近に利用されたように、彼のエンブレムも信仰生活に用いられることを意図している。クォールズは、「読者へ」でエンブレムを「黙した寓話」(a silent parable)と定義している。

An Embleme is but a silent Parable. Let not the tender Eye checke, to see the allusion to our blessed SAVIOUR figured, in these Types. In holy Scripture, He is sometimes called a Sower, sometimes, a Fished, sometimes, a Physitian; And why not presented so, as well to the eye, as to the eare? (“To the Reader”, A3)

ここでいう寓話 (Parable) とは、イソップのような教訓話ではない。Parable とは、John Diodati が定義したように、み言葉の真の意味を教えるためのもので、キリストが「種まく人」、「魚とり」や「医者」と呼ばれるのに通じている。(Annotations, pt.2, p.20)<sup>10)</sup> その目的のために、詩文のみならず図像も付してあるというのである。図版の二人のアモルに似た像はフーゴに抛り、Divine Love と human soul を表している。カトリック派の瞑想は、図像に描かれた聖句の場面などを心中に再現して、その場に臨在するかのようにキリストの受難に心を寄せる。その場面のみ想起し、瞑想の対象とする。一方、プロテスタント派の瞑想は、聖句、万物や自己を対象として、これらから自由にそのときの自身の感情や霊の状態に応じて神とのコミュニケーションを図る。さらに時も場所も選ばず、occasional に瞑想を始めることができる。プロテスタント派の瞑想法を確立したジョゼフ・ホールは、“The Imprese of God” と題した説教において、聖句をエンブレムの材料として象徴的に用いることを擁護している。「ゼカリヤ書」14:20の「その日には、馬の鈴にも「主に聖別されたもの」と銘が打たれ、主の神殿の鍋も祭壇の前の鉢のようになる」にでてくる馬の鈴を例に挙げて、次のように述べる。

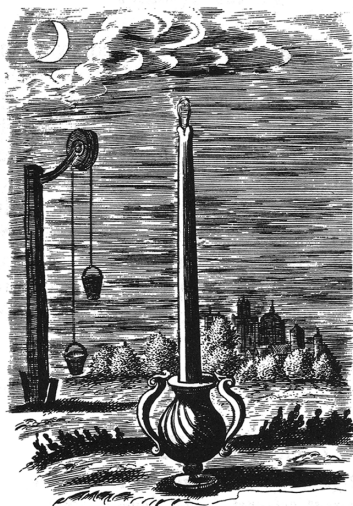
As in all Impresses, there is a bodie, and a soule, as they are termed; So both are here without any affectation: The Soule of it is the Motte, or Word, Holinesse to the Lord: The bodie, is the subject it



selfe… Bells of the horses…The Israelites were charged to make their Embleme the Lord of God; for their posts, for their garments. But these things must not be written upon our walls, or shields only; They must be written upon our hearts; else we are as very painted walls…Happy is it for us, though we write no new Emblemes of our owne, if we can have this holy Imprese of God, written not in our foreheads, but in our hearts, Holinesse to the Lord. (*King James Bible*)<sup>11)</sup>

つまりこの聖句は、モットー、形象（馬の鈴）そしてその解釈といった3部位からなるエンブレムととらえられている。これは、 sacramentにおける言葉としての協働を説いたカルヴァンにも通じる。(Lewalski 186) しるしは肉体に、言葉は魂にたとえられ、聖句に登場する事物は、神の真理を表象している。目に見える事物とみ言葉を結びつける照応は、“I am a little world made cunningly / Of Elements, and an Angelic sprite,” (1-2行) と、自己と神の創造した世界を結びつける、ダンの『聖なるソネット』5番にも認められる。神の創造された世界の中の私の世界を、水や火で清めてくれるよう神に懇願する個人的瞑想といえる詩であるのだが、ダンの“I”は、すべての人間にあてはめられる。個々人が「私の世界」で、“black sin” (3行目)によって墮落した私の魂を嘆き、救いを求めて痛悔する。ダンのような詩は、プロテスタント派の瞑想の個人的な内省という特質を持っている。

クォールズの『エンブレム集』も、信徒にそうした瞑想を行う機会を提供している。聖句の場面、それをわかりやすくするのに加筆された物や擬人像、そして human soul の像に自己の良心を投影し、瞑想を行うことができるよう、クォールズのエンブレムは工夫されている。さらに、モットーに限っても、「詩篇」から引用したものが『エンブレム集』に22、『人生のヒエログリフ集』に4とかなり多くある。そのなかから、詩篇51番5節より採ったモットーを持つヒエログリフ1番をみてみよう。〔図2〕“Behold I was shapen in Iniquity, and in sin did my mother conceive me.”というモットーで、罪を負って生まれた「わたし」すなわち人間は、炎の消えた小蠟燭 (“I am a Tapour wanting light”) であり、むなしく歩む巡礼者 (“Pilgrims they did spend their idle steps”), 闇の



*Sine Lumine inane.*

図2 Francis Quarles, *The Hieroglyphs of Life od Man*, no.1

子供 (“a mere child of night”) にたとえられ、最後に死すべき存在である自身を知れと教える。図像には、炎の消えたまだ長さの十分ある小蠟燭と、左側の《運命》の上下を示唆する木にかけられた2つのバケツが描かれ、それらの寓意は目新しいものではない。しかし、このヒエログリフ集が小蠟燭が燃えて小さくなるのに合わせて命の灯が消えていくのを表し、死を想い改心を促す瞑想詩であるので、ヒエログリフ集を始めるのにふさわしい。エンブレムを「読む」ことで、信徒は自己を内省し、死すべき身を想って折々に

信仰を高めることができた。そうした図像と言葉の協働が信徒の瞑想に貢献したことは、以下にみていく墓石彫刻にクォールズのエンブレムが使用されていることでも明らかである。

クォールズの『エンブレム集』は、物づくりの職人たち、たとえば石工 (mason) にも装飾のパターンを提供した。エンブレムは信徒の瞑想の助けとして機能するとともに、欧米の物質文化においてさまざまに応用されている。それらの広範な領域における応用例のなかで、墓石や死者の真鍮記念板 (brass) にほどこされた銘文や図像は、宗教的なエンブレムの応用表現として貴重な分野である。エンブレムの応用表現としてイングランドにおける死者の真鍮記念板については、カール・J. ヘルトゲン (Karl J. Hölftgen) によって、いくつかの例が考察されている<sup>12)</sup>。さらに、墓石彫刻に関して、クォールズが大西洋を越えて17世紀後半のニュー・イングランドの植民地で受容されていたことを示し、新たなエンブレムの受容を跡付ける。そこから宗教的エンブレムが、プロテスタント派の瞑想においてどのように機能していたのかが理解できるであろう。

墓石彫刻にエンブレムが応用されたのは、とくにスコットランドにおいてであり、エンブレムを用いた墓石彫刻が現存している。1637-1647年にかけては、スターリング（Stirling）周辺の東部地域に、また1701-48年にかけては南西部にまとってみられ<sup>13)</sup>、それらのうちには、明確にエンブレムから採られた墓石彫刻がある。それらは、単なるエンブレムの受容例としてだけでなく、1630年代の宗教文化を知る上で重要である。死者を忘れないよう祈念するとともに、自らの行く末を瞑想するために作られたエンブレム的な墓石は、プロテスタン派の瞑想方式や理念に合致しているのである。

スターリングのホリー・ルード教会（Holy Rude Kirk）にある石工、John Serviceが父のJohnのために立てた墓石は、クォールズから採った図像のみならず、そのエンブレムの詩文も彫られており、エンブレムの本質である図像と詩文の協働を示している点で大変興味深い墓石である。

ジョン・サービスは、スターリングに居住した石工である。スターリングは、歴史ある町で、ホリー・ルード教会は、1543年7月にメアリー・スチュアートの、1567年には彼女の息子のジェームズ6世、のちにイングランド王ともなるジェームズ1世の戴冠式が行われた教会である。この教会は、ジュネーブでカルヴァンに学び、長老派によるスコットランドの宗教改革を主導したジョン・ノックス（John Knox）が説教壇にあがっていたため、スコットランドでいち早く宗教改革を経験している。ノックスは、スコットランド信条を作成し、それは1560年、議会で採択された。しかし、1561年に帰国したメアリーは、ローマ・カトリック教を再建しようとし、この信条を認めなかった。メアリーはその後、個人的スキャンダルや貴族間の反目、特に1566年のダーンリー卿の殺害で失脚したため、1567年に長老派がスコットランド国教となる。ノックスは、女王が失脚する前から幾度も接見して、カトリックの習慣を改めさせようとした。また、“Blast of the Trumpet against the monstrous regiment of Woman”（1558）というパンフレットで、メアリーやエリザベスのような女性の統治者を批判した。そのためもあって、エリザベスのスコットランドの宗教改革への対応に決定的な影響を与えた人物である。彼が進めた長老派に拠る改革は、彼の死後、アンドリュー・メルヴィルに受け継がれるが、スコットランドでは実際にはカ

トリック的な司教制と長老制が混在していた。そして1581年、長老派は国王の至上権を確立する動きに対抗するが、1584年、暗黒法により彼らは打倒されてしまう。(浜林 127-32) そうした宗教的混乱の時代、サービスは1603年、Kilmacolm から Stirling へ移住し、翌年市民 (burgess) として認められている。1634年、息子のジョン・サーヴィスも市民として認められ、36年に教会から父のジョンの墓石を立てる許可を申請し、37年に認められている。(Harrison 79-96) そこでこの墓石は、1636-7年の作とされている。ホリー・ルード教会にはほかに日時計などを彫った17世紀の墓石があるが、これらも息子のジョンが関わったと思われる。墓石は、高さ1メートルほどの大きなサイズで、両面ともエンブレム装飾がほどこされている。墓石の西面には、クォールズの『エンブレム集』第3巻の冒頭におかれたエンブレムと、同じく第3巻13番のエンブレムの2つが、ウロボロスで囲われた円形の面のなかにまとまって彫られている。〔図3〕 こうした2つのエンブレムの画像がひとつに収められている墓石は、例外的に手の込んだものである



図3 John Service の墓石 (西側面)  
筆者撮影



*Are not my dayes few? Cease then, and  
let me alone that I may bewaile me a little.*  
Job . 30 . 20 .  
will. jones . sculpsit

図4 Francis Quarles, *Emblemes* (1635)  
3:13

と言える。左側の図像が、クォールズの『エンブレム集』3:13である。〔図4〕出典はヘルマン・フーゴの『敬虔なる欲望』（103頁）で、モットーは「ヨブ記」10:20「わたしの人生など何ほどのこともないのです。わたしから離れ去り、立ち直らせてください」から採られており、《アニマ》(Anima)が日時計を指さし、《神的愛》(Amor Divina)がそこから《アニマ》を引き離そうとしている。ウィリアム・マーシャル(William Marshall)が彫ったクォールズのエンブレムの図版には、《アニマ》の足元に砂時計が描き込まれており、砂時計が現世の儚さを表象するため、《アニマ》が現世に未練をもっていることを表している。墓石の図像は日時計のみで、動作の意味がはっきりしないかもしれないが、クォールズのエンブレムの銘文、“Are not my dayes few? Cease then, and let me alone, that I may bewaile myself a little”が、墓石の《アニマ》の口の上に見える「吹き出し」にみられ、この図像の動作の意味を正確に伝えている。これは、《神的愛》のしぐさとともにクォールズのエンブレムの特質といえるドラマティックな構成をよく伝えている<sup>14)</sup>。

さらに、この右にはクォールズの『エンブレム集』第3巻の冒頭に描かれている“Entertainment”、つまり第3巻全体の要旨を表した題扉というべき図像が彫られている。〔図5〕弓を膝に置き、矢が胸から天を指し、胸を開くポーズをとってひざまずいている《アニマ》の頭上に、目と耳があり、そして3本の矢が先を上に向けて描かれている。空中に描かれた目と耳は、遍在する神を表象している。3本の矢には、それぞれ“Gemitas”（嘆く）、“Vota”（誓う）、“Suspiria”（後悔する）と記されている。出典であるフーゴでは、“Ah!”, “utinam”, “Heu”とあり、クォールズに対応している。矢の下にみ



*Lord all my Desire is before Thee & my groaning is not hid from Thee: Ps 38*

図5 Francis Quarles, Emblemes (1635), The Entertainment of Book 3.

えるスクロールに似た部分には、“Ah Lord”, “Oh that”, “Alas” と記されていて、これらの矢は、《アニマ》の嘆きや苦しみを表象していると思われる。そして、《アニマ》の口から発せられているのは、この図像の意味を明らかにする「詩篇」38：10からの銘文、“Lord, all my Desire is before Thee, & my groaning is not hid from thee”（「わたしの主よ、わたしの願いはすべて御前にあり、嘆きもあなたには隠されていません。」）である。詩篇38番もまた、痛悔詩篇である。3本の矢に記された言葉とともに、罪ゆえに神から見捨てられることを恐れる内容である。胸を開くポーズは、イエズス会派の図像においてポピュラーなもので、16世紀日本で制作された『マリア十五玄義図』（京都大学総合博物館蔵）というザビエルとロヨラを配した絵画のなかでも、ザビエルが胸を開く仕草をしている<sup>15)</sup>。〔図6〕これは、熱烈な信仰を表象すると解釈されており、フーゴによるこの図像は、新年のギフトブックとして出版され、何度も再版されたイエズス会のエンブレムブック、Adrian Poirters, *Het daeghelycks nieuwe-iaer spiegelken van philagie*（アントウエルペン、1673）の冒頭のエンブレムに用いられており、広く受け入れられていたと思われる。（Daly and Dimler 268）信仰を表象する図像と、罪に苦しみ神を恐れる詩篇38番からの引用は、常に心を天に開いて信心するよう訴えている。

先に触れた左側の図像は、砂時計や日時計に代表される現世的なものに執着した《アニマ》を描いていたが、右側の図像は、現世を嘆き、天



図6 「マリア十五玄義図」(部分) (京都大学総合博物館蔵)

を志向する《アニマ》の心情が吐露されている。つまり、このジョン・サービスの墓石彫刻は、此岸から彼岸へ向かう魂のドラマを描き出しており、それを包むのは、「永遠」を表すウロポロスである。クォールズの図版にはないウロポロスを加えて、魂が肉体を離れて永遠の世界へ旅立つことを一層強く示している。クォールズのエンブレムを知らないものにも、銘文や吹き出しで図像の意味を正しく理解できるようにしている。とりわけ現世を去り難い魂に、改心して神の永遠の祝福にあずかることの重要性を描いて、墓を訪れるすべての者に瞑想を促すである。これは、前述した occasional meditation に相応する。聖句のみならず、図像を見ることで、目にも神のサインをみせ、耳と目による瞑想というクォールズのエンブレムの本質を表している。

また、墓石の東面に彫られているのは、クォールズの『エンブレム集』の最後に描かれた図像である。〔図 7-1〕図 7 は、クォールズの数少ない出典のないエンブレムである。中央のパネルの両側には、石工の使う道具類が彫られており、その中央には石の祭壇で本を開く《アニマ》が描かれている。彼女は肩肘をついて、片手は球体におかされている。そして、2人の天使が彼女の頭上に冠をかざしていると同時に、2人が手にしたスクロールが左右に垂れさがっている。左の方のスクロールは、“Sis fidelis usque ad Mortem”、右のほうのには、“et dabo tibi Coronam vitae”と彫られている。これらは、クォールズの銘文、“Be thou faithful unto death, and I will give thee the crowne of life”（「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに命の冠を授けよう」という、「黙示録」2：10からの引用句である。この図像は、“Farewell”と記された向かい



図 7-1 Francis Quarles, *Emblemes*, The Farewell.



図 7-2 John Service の墓石（東側面）  
筆者撮影

の頁と対になっており、正確にはエンブレムというより、別れのあいさつに付したイラストレーションといえるであろうが、墓石の西面の現世的なものに執着して嘆息している《アニマ》と、東面の死を受け入れる《アニマ》は、一組となって天へと旅立つ魂の情景を描いたドラマを作り上げている。

ジョン・サービスの墓石に含まれている象徴やエンブレムは、当時の石工が装飾のパターンのモデルとしてエンブレムを使っていたこと、さらに選ばれたエンブレムの銘文が「詩篇」や「黙示録」からのものであった

ことは、当時の宗教的な状況を知る手がかりをわれわれに示すものと考えられる。1636 年ごろというのは、チャールズ 1 世の専制政治を支持し、カトリック的な礼拝様式の統一を強制して急進的ピューリタンを圧迫したロード大主教（William Laud, 1573-1645）に代表される時代である。とくに 1637 年、強烈な国教会派プロテスタントであるチャールズは、カトリック的かつアルミニウスの「ロードの祈祷書」の使用をスコットランド教会に強制して、スコットランド国民の抵抗運動を引き起こした。人々は長老教会を守ろうとして国民契約に署名し、1638 年にはナショナル・カベナントと呼ばれるグラスゴーにおける国民契約の大会が開かれた。1639 年、チャールズはこれに対して武力による制圧を試み、主義戦争が起こった。スターリングでも国王軍との戦いが繰り広げられ、国王軍は敗北する。ジョン・サービスの墓石には、両軍が放ったマスケット銃の弾痕が点々と残っており、教会も戦場となったことを物語っている。こうした宗教的騒乱のときに建てられたこの墓石は、クォールズの『エンブレム集』が宗派を限らず受け入れられていたことを示す好例である。クォールズの初版から 1639 年の第 2 版まで、5 巻 14 番のエ





*How amiable are thy Tabernacles O Lord  
of Hosts, my Soule longeth, yea euert  
saineth for the courts of the Lord.*  
Wilt. Marshall. Sculp.

図8 Francis Quarles, *Emblemes*,  
5:14 (1639)



*How amiable are thy Tabernacles O Lord  
of Hosts, my Soule longeth, yea euert  
saineth for the courts of the Lord.*  
Wilt. Marshall. Sculp.

図9 Frances Quarles, *Emblemes*,  
5:14 (1643)

ンブレムには開かれた天に神の姿がみられる。〔図8〕だが、それ以降、神はテトラグラマトンで象徴され、具象されない。〔図9〕もちろん、クォールズは詩文において神を具象したことに対して、「わが大胆な試みを許したまえ」と述べ弁明しているのだが、プロテスタント派の図像嫌悪は周知のことであるとはいえ、17世紀のごく短い期間、カトリックとプロテスタント派ともに、図像の表象に関して寛容であったと言えるのではないだろうか。派を問わず、信条を堅固にするためにエンブレムを用いた瞑想を受け入れていたと考えられる。クォールズ自身は、敬虔な国教会の信徒で、エセックスに引退後、『エンブレム集』を作成し、1639年にはロンドンの史料編纂官に任命された。ピューリタン革命が勃発すると、チャールズの擁護者となり、ピューリタン派非国教徒による迫害を受けたと言われている。しかし、彼の政治的思想は一貫した

ものではなく、アルミニウス派の行き過ぎた行為を批判し、国王に対して統治者として教会と国家の統一と、平和の回復維持につとめるよう、期待していた。(Höltgen, 1986, 34-5) 彼の息子のジョンは、オクスフォードで国王軍のために戦い、その後、大陸に逃亡した。クロンウェル率いる議会軍に国王軍が敗北すると、スコットランドは国教会の監督制を否定し、長老制を主張した。長老派のウェストミンスター信仰告白は、1647年スコットランド議会で、翌年には英国議会で採択され、長老派は王政復古までスコットランドを支配することとなる。

墓石彫刻はまた、クォールズが大西洋を越えて17世紀後半のニュー・イングランドの植民地で受容されていたことを示し、新たなエンブレムの受容を跡付けてくれる。ロード大主教に代表される圧迫に対して、英国を逃れたピューリタンが、クォールズを新大陸で受容していた証拠がマサチューセッツ州の墓石彫刻にも認められるのである。新大陸に渡った石工もまた、初期から墓石に図像や文字を彫っていた。ボストンのKing's Chapelのチャーチ・ヤードに立つ1678年に23歳で亡くなったジョゼフ・タッピング (Joseph Tapping) の墓石もまた、クォールズか



図10 Joseph Tapping の墓石 (1678) <http://www.hawthorneinsalem.org>, 16, Oct. 2015, (Photograph by Joseph R. Modugno)

ら採られた図像を含んでいる。〔図 10〕 イングランドとニュー・イングランドの文人たちの交流は、たとえばジョン・ジョスリン (John Josselyn, fl.1638-75) という 1638 年と、1663 年からの 8 年間、2 度にわたりニュー・イングランドに滞在した作家の文章にもみられる。彼は、マサチューセッツでの滞在を記した *Account of Two Voyages to New England* (London, 1674) で、次のように記録している。1638 年 7 月 11 日、彼が ボストンを訪れたとき、“… presenting my respects to Mr. Winthorpe the Governor, and to Mr. Cotton the Teacher of Boston Church, to whom I delivered from Mr. F. Quarles, the poet, the Translation of the 16, 25, 51, 88, 113, and 137 Psalms into English Meeter, for his approbation” (19-20) と、ウィンソープを訪問したのち、ジョン・コットン (John Cotton, 1585-1652) にクォールズの詩篇訳を渡したことに言及している<sup>16)</sup>。ここでも、クォールズの訳した中に、痛悔詩篇である 51 番が挙げられている。クォールズが亡くなったのち、妻が原稿の返還を求めた手紙が残っているが、現在、訳稿は 詩篇 1 から 8 までを写したと思われる Portland 手稿しか 現存しない<sup>17)</sup>。ただし、コットンがそれらを *Bay Psalm Book* (1640) に取り入れられたかどうかは不明である。ジョン・コットンは、1633 年、国教会による非国教徒の迫害を逃れて、ウインスロップに招かれ家族とともにボストンへ渡った。彼はそこで 1633 年から 52 年まで最初の教会の teacher を務めた新しい教会組織である組合制 (Congregationalism) を代弁する人物である。著作も多く、なかでも何十年間もピューリタンの子女を教えるカテキズムとなった *Milk for Babes, Drawn out of the Breasts of Both Testaments* (1646) は、1701 年ごろ *The New England Primer* に合本されるのだが、アメリカ初の子供向けの書であり、その意義は大きい<sup>18)</sup>。*Bay Psalm Book* (1640) は、入植地で初めて印刷された本であり、ピューリタンたちが重んじた礼拝において欠かせない讚美歌として歌われもし、重用されていた<sup>19)</sup>。上述のジョスリンの引用は、クォールズが詩人として評価されていたということを示唆している。彼の『エンブレム集』も詩篇をモットーに用いていたが、ジョスリンもまた、痛悔詩篇 51 を挙げており、この詩がプロテスタントにとって重要であったことを示唆する。51 番の原稿はみつからないが、図像のみならず、文学面でのトランスアトランティックな交流の一例が看取できる<sup>20)</sup>。

さて、タッピングの墓石には、上部に砂時計、両脇に翼のあるスカルが描かれている。これはピューリタンにとって、希望と絶望を表す図像で、墓石彫刻において広くみられる<sup>21)</sup>。そして、中央部にはクォールズの *The Hieroglyphikes of the Life of Man* (London, 1638) の6番目のヒエログリフの図像が用いられている。前述したように、この作品は、人間の命を蠟燭で表象して、人生の進行を表していく。蠟燭が燃えて短くなるにつれて、死に近づいていく人生について瞑想を促すエンブレム集である。6番目のエンブレムは、“Tempus erit”（「あらゆるものに、定められた時がある」、コヘレトの言葉3:1）という銘のもと、《死》が煌々と燃える蠟燭の炎を蠟燭けしで消そうとしている背後から、砂時計を持った《時》が《死》の手を留めようとしている図像が付されている。さらに、輝く太陽と日時計が4時を示している。詩文は、《死》と《時》の対話になっており、《時》がまだ早いから炎を消す手をひっこめるよう訴えるのに対し、《死》は自分にはいつでも消せる権利があると主張する。さらに、アウグスティヌスの言葉をひいて、いつ何時訪れるかもしれない「時」につねに備えるよう諭す。この墓石もまた、此岸から彼岸へ旅立つとき、すなわち死を想う瞑想へと誘う。タッピングの墓石には、ジョン・サービスのようなエンブレムの詩文は刻印されていない。刻印されている銘文は、“Memento Mori”と“Fugit Hora”であり、取り立てて珍しいものではないが、1700年以前のニュー・イングランドで、墓石に銘文が彫られているのは珍しい。(Farber 24)ただ、23歳の



図 11 John Foster の墓石 (1681) [www.findagrave.com](http://www.findagrave.com), 17, Oct. 2015.

若さで亡くなった彼には、時計がまだ4時を指しているこのエンブレムの寓意はふさわしく、ラテン語銘文とともに墓石を見る者にも瞑想を促すであろう。

最後に、マサチューセッツ州ドーチェスターにあるジョン・フォスター (John Foster, 1648-81) の墓石に言及した

い。ボストンで初めて印刷所を開いた彫版師かつ出版業者であったジョン・フォスターの墓石（1681年）には、タッピングの墓石に用いられたものと同じ図像が使われている。〔図11〕『人生のヒエログリフ集』の第6番のエンブレムで、はっきりと太陽が輝き、蠟燭の炎を消そうとする《死》と、それを押しとどめようとする《時》が彫られている。そして、ジョン・サービスの墓石同様、忠実にクォールズの図像を写している。スレートに彫刻したのは、チャールストンの石工だと推測されているが、石工が、大西洋の両側でクォールズを受容し、活用していたことが伺える。単にエンブレムの図像を写したのみならず、付された詩文についても理解し、墓石をよりプロテスタントの瞑想にふさわしいものに仕上げようとしていたと思われる。

プロテスタント派の瞑想は、まず目で見た形象をタイポロジカルに理解し、己と神との対話を充実させるものである<sup>22)</sup>。第一段階で感覚的な具象物を用い、瞑想に発展させることは、宗教的エンブレムの本質的な目的である。時代が下がり、エンブレムブックの人気が下火になると、本論で取り上げたようなプロテスタント派の瞑想法の方式にあった墓石彫刻はみられない。クォールズの『エンブレム集』が出版された1630年代は、「詩篇歌」の普及による詩篇文化の成熟にともない、プロテスタント派の瞑想法が確立された時期でもあった。そして、宗教的エンブレムは折々に個人のできるプロテスタント派の瞑想法に適合して、広く信徒の生活に浸透していたことが看守される。そうした宗教的エンブレムは、此岸と彼岸を繋ぐ墓の彫刻にも応用され、死後の審判の日を忘れずに信心を高める助けとなっていたのである。

## 注

- 1) ルターの1513年の年初の講話は、「詩篇」についてであり、彼の最初の出版作品は、韻律を付けた「詩篇」と「聖歌」であった。詳細はHannibal Hamlin, *Psalm Culture and Early Modern English Literature* (Cambridge: Cambridge University Press, 2004), 22-3を参照。
- 2) スターンホルドとホプキンズの「詩篇歌」の成立や多方面にわたる影響については、Hamlin, 前掲書の第一章を参照。
- 3) シェイクスピア『ヘンリー4世・第一部』からの引用は、Jonathan Bate and Eric Rasmussen eds. *RSC Shakespeare* (2017) に拠る。
- 4) クォールズの『エンブレム集』は、初版が出た同年、再版されるほど反

響が大きかった。詳細は John Horden, *Francis Quarles: A Bibliography* を参照。

- 5) 英国においてプロテスタント派の瞑想法を確立したのは、ジョゼフ・ホールである。ホールも「詩篇」の一部を訳している。そのさい、シドニー兄妹もそうであったが、さまざまな詩脚を試し、原典により近い優れた訳を創出しようとした。スターンホルドとホプキンス訳と 17 世紀の英訳詩篇との関連は、James Doelman, *King James I and the Religious Culture of England* (Cambridge: D. S. Brewer, 2000) 第 7 章に詳しい。
- 6) ロジャースからの引用は、Barbara Kiefer Lewalski, *Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1979), 149 頁に拠る。
- 7) ヘルトゲン、前掲書 52 頁に拠る。
- 8) *The Book of Common prayer* に基づく。もとは、1539 年の *Great Bible* に取められた Miles Covedale の翻訳である。
- 9) ダンの引用は、Donald R. Dickson ed. *Norton Critical Edition: John Donne's Poetry* (2007) に拠る。
- 10) Lewalski, 前掲書 122 頁。女史は第 2 章で、Diodati の寓話の定義を「詩篇」の文学的特質と関連づけている。
- 11) Gerald Hammond and Austin Busch trans and eds. *The English Bible: King James Version*, vol. 2 (2012) に基づく。
- 12) Karl J. Höltingen, *Aspects of the Emblem: Studies in the English Emblem Tradition and the European Context* (Kassel: Edition Reichenberger, 1986) 第 3 章参照。
- 13) 墓石の分布は、以下を参照。Michael Bath and Betty Willsher, "Quarles on Scottish Gravestones" in *Emblems and Art History (Glasgow Emblem Studies vol.1, 1996)*, p.169. スターリングでの墓石調査には、ストラスクライド大学名誉教授・グラスゴー大学上級研究員であるマイケル・パース氏の協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。
- 14) クォールズのエンブレムのドラマティックな構成に関しては、以下を参照。Rosemary Freeman, *English Emblem Books* (London: Chatto & Windus, 1948), 114-32.
- 15) 胸を開く聖ザビエル像は、1596 年以降ハレの版画を端緒に、ヴィーリクスなど数多くみられる図像である。木村三郎氏は、『ニコラ・ブッサンとイエズス会図像の研究』《中央公論美術出版、2007》第 17 章、334-52 頁において、聖ザビエル像の展開と目録を提供している。
- 16) ジョスリンの著作の引用は Höltingen, "New Verse by Francis Quarles: The Portland Manuscripts, Metrical Psalms, and the *Bay Psalm Book* (with text)", *English Literary Renaissance* 28:1 (Winter, 1998), 127 に拠る。

- 17) ノッチングダム大学図書館所蔵。この写本の詳細は、Höltgen, (1998), pp.118-30を参照。
- 18) *Bay Psalm* と *New England Primer* との関連は、Daniel A. Cohen, “The Development of the New England Primer”, *Children Literature* 5 (1976), pp.52-7を参照。
- 19) *Bay Psalm Book* 成立に関しては、*The Bay psalm Book Being a Facsimile Reprint of the First Edition, printed by Stephen Daye at Cambridge, in New England in 1640* 中の Wilberforce Eames によるイントロダクションを参照。
- 20) 近代初期英文学や文化に及ぼした詩篇の広範な影響とその重要性に関しては、Hamlin, 前掲書に詳しい。
- 21) たとえば、以下は Salem のチャーター・ストリート墓地にある Nathanael Mather の墓石 (1688) である。[図 12] 翼とスカルを上部に配し、銘文には “An Aged person / that had seen but / Nineteen Winters / in the World” と記されている。この人物が12歳でハーバード大学に入学するほど優秀であったが、若干19歳で亡くなったことを表している。彼については、以下を参照。Sidney Perley, *The History of Salem Massachusetts*, vol. 3, 231-32.

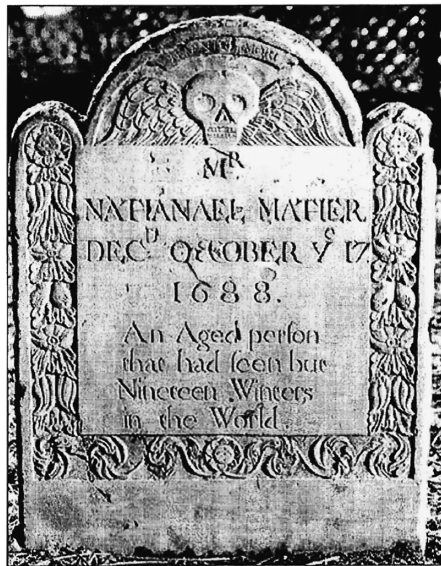


図 12 Nathanael Mather の墓石 (1688) <http://www.hawthorneinsalem.org>, 16, Oct. 2015 (photograph by Joseph R. Modugno)

- 22) エンブレムとプロテスタント派の瞑想との関連は、以下に詳しい。  
Lewalski, 前掲書、第5、6章、および Michael Bath, *Speaking Pictures* の第7章、特に160-168頁を参照。

#### 引証文献 (英文)

- Bath, Michael, *Speaking Pictures: English Emblem Books and Renaissance Culture*. London and New York, 1994.
- Bath, Michael, and Willsher, Betty, "Emblems from Quarles on Scottish Gravestones", *Glasgow Emblem Studies*, vol. 1 (1996) pp.169-201.
- Brown, George, "The Psalm as the Foundation of Anglo-Saxon Learning" in Nancy Van Deusen ed. *The Place of the Psalms in the Intellectual Culture of the Middle Ages*. (Albany, N.Y.: State University of New York Press, 1999), 1-24.
- Cohen, Daniel A. "The Development of the New England Primer", *Children Literature* 5 (1976), pp.52-7.
- Daly, M. Peter and Dimler, G. Richard eds, *Corpus Librorum Emblematum: The Jesuit Series, Part Two*. Toronto, Buffalo, London, 2000.
- Doelman, James. *King James I and the Religious Culture of England*. Cambridge, 2000.
- Donne, John. *John Donne's Poetry*. Donald R. Dickson ed. A Norton Critical Edition, London and New York, 2007.
- Freeman, Rosemary. *English Emblem Books*. London, 1948.
- Hamlin, Hannibal. *Psalm Culture and Early Modern English Literature*. Cambridge, 2004.
- Höltgen, Karl Joseph. *Aspects of the Emblem: Studies in the English Emblem Tradition and the European Context*. Kassel, 1986.
- \_\_\_\_\_. "New Verse by Francis Quarles: The Portland Manuscripts, Metrical psalms, and the Bay Psalm Book (with text)" in *English Literary Renaissance* 28: 1 (Winter, 1998), pp.118-26.
- Horden, John. *Francis Quarles: A Bibliography of his Works to the Year 1800*. Oxford Bibliographical Society Publication, N. S. 2. Oxford, 1953.
- Kuczynski, Michael P. "The Psalm and Social Action in Late Medieval England" in Nancy Van deusen ed. *The Place of the Psalms in the Intellectual Culture of the Middle Ages*, Albany, N.Y., 1999, 191-214.
- Lewalski, Barbara Kiefer. *Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric*. Princeton, NJ, 1979.
- Perley, Sidney. *The History of Salem, Massachusetts* in Three Volumes, Salem, Mass. 1924-28.
- Quarles, Francis. *Emblemes (1635) and Hieroglyphikes of the Life of Man (1638)*,



intro. by Karl Joseph Höltgen and John Horden, Hildesheim, Zürich, New York, 1993.

Shakespeare William. *The RSC William Shakespeare Complete Works*, Jonathan Bate and Eric Rasmussen eds. Basingstoke, 2007.

Tomlinson, Gary, ed. *Source Readings in Music History: The Renaissance*. New York and London, 1998.

#### 引証文献（和文）

木村三郎『ニコラ・プサンとイエズス会図像の研究』（中央公論美術出版、2007年）

浜林正夫『イギリス宗教史』（大月書店、1987年）

\* 本論は、科学研究費による基盤研究(C)「英米文学におけるトランス・アトランティックなエンブレムの受容と変容」（平成 24～27 年）および同「近代英国のエンブレムと宗教文学の相関性に関する研究」（平成 27～29 年）の成果の一部である。